

# やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

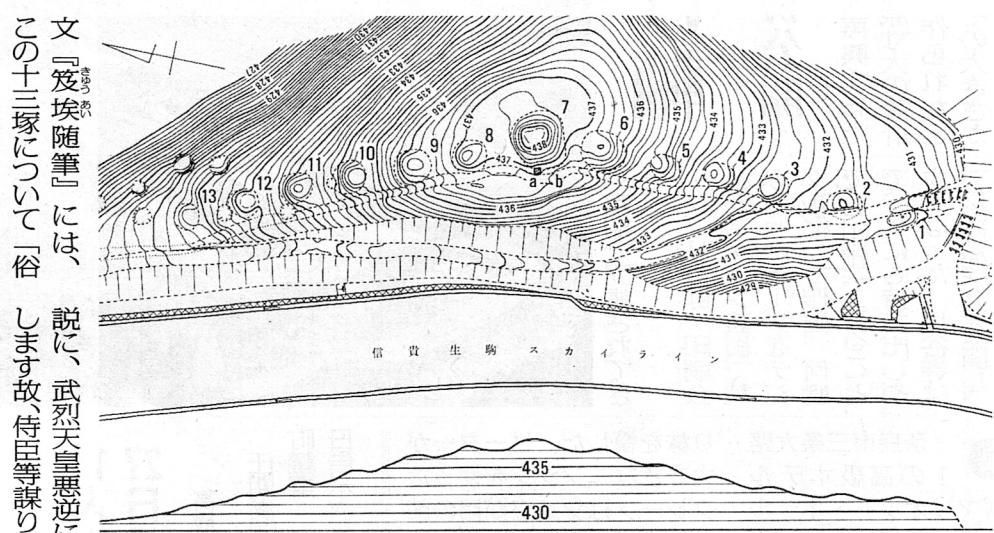
時折、東大寺二月堂に参って、奈良盆地を一望する。西の果てには生駒山地の山並みが南北に長く延びて美しい。この山を越えて大阪と大和を結ぶ峠道は多い。暗越奈良街道はその一つでよく知られているが、暗峠から直線距離で4キロ足らず南に十三峠があり、十三街道が通っている。大阪側は八尾市神立から大阪玉造に至り、大和側は平群町福貴畠を経て、童田・法隆寺へと通じている。

峠のすぐ北側の尾根頂上に、直径約6・5m、高さ1・5mほどの丸い大塚（親塚）が築かれ、これを中心にして南北両側の傾斜面に小塚（子塚）がほぼ等間隔に6基ずつ、合計13の塚が並んでいる。西側は信貴生駒スカイラインが走っており、親塚のそばには、「十三塚」と刻んだ嘉永3年

（1850）の標石がある。大阪の播磨屋太七と淀屋定助によって立てられている。

この十三塚について記した最も古い記録は、延宝7年（1679）刊行の『河内鑑名所記』で、「十三越峠 山乃上二塚十三ありし故ニいふとなり」とあり、17世紀終わり頃には十三塚があったことがわかる。十三街道という呼称もこの十三塚に由来したものだった。

同様の記述がその後刊行された『和漢三才図会』、『河内志』、『河内名所図会』などにも踏襲され、どれも風変わりな峰名が、十三塚に由来することを伝えるだけであったが、京都の豪商百井塘雨が記した文化元年（1804）年序の紀行



生駒十三峠測量図（『生駒十三峠の十三塚』平群町教委1987）より

## 女媧、非業の死 十三塚

表

（奈良民俗文化研究所代  
調査を迎える。

火の雨降ることありと、石窟を造りすかして、入御奉り、侍臣女媧十三人此に入れ、則ち埋めて殺し奉る。その為に十三人の塔を立てたるなり」と無道惡逆を伝えると、武烈天皇の時代に、侍臣女媧が非業の死を遂げた話を伝えている。

明治32年（1899）にこの地を訪れた歴史学者の喜田貞吉も、氣高い姫宮と12人の侍女が生き埋めにされていたという話を採集している。人々の関心が次第に高まるなか、この塚は神武天皇の皇后媛距輪五十鈴媛の御陵であるとする説も生じて広く一般にまで流布するようになった。十三塚

は、女媧、姫神、神武天皇の皇后となぜか一貫して女性にまつわる伝承がつきまとい、ついに昭和8年（1933）の発掘調査を迎える。

次第に各種の伝承が生まれ始めていることがわかるが、地元福貴畠の土地所有者が大正8年（1919）に提出した「古